

特集：新しい世紀へ向けて

東洋英和女学院が鳥居坂の地に開校してから今年で114周年を迎えます。東洋英和の第2世紀に向けて、中高部の校舎改築工事に着手してから10年以上の月日が経ち、昨年の6月には、新マーガレットクレイグ講堂に、待望のパイプオルガンが設置されました。

その間、プレハブ時代を含めて、さまざまな困難と苦労がありました。今号では、校舎移転のあらましとプレハブ校舎の思い出、旧校舎時代のオルガンと新しいパイプオルガンについて、関係の先生方に書いていただきました。

中高部校舎第三期工事について

高等学部部長 黒川 信也

学院創立百週年記念事業として、中高部校舎の改築工事が計画・実施されましたが、今回の第三期工事をもって完了することとなりました。

校舎は教育方針の形象化・視覚化されたものがありますから、校地面積・資金面の制約の中で、意匠・位置・機能性等各面から見て整っていることが求められるものであります。

学院当局はじめ関係各位のご指導ご支援を得て、今日に至りましたことに対し、改めて謝意を表する次第です。

今回、第三期工事の概要を紹介するようにとのことです。以下中高部内部での検討協議の状況を中心に述べることにします。



新マーガレットクレイグ記念講堂外観

1984(昭和59)年 創立100周年 第二期工事竣工

1985年 校舎検討委員会発足

1988年 校舎の全体構想・位置等をふまえる必要があるため、校舎校地整備委員会に改称。

1990. 4 校舎建築委員会とする。

大講堂切り離し存続は不可能と判明。

同時着工の必要が生じる。

1990. 10 理事長より校舎及び大講堂の建築計画が発表される。当初の計画にあった本部棟

は建築面積の関係から困難であること、また同窓会室については運営上、立地条件に独自の要望をもっており、今回の建築に含めない。但し、財政上の面もあるので、中高部として学則定員（高等部各学年定員200名）を満たす生徒数を受け入れることの要望が提示された。

関連して、建築計画の予定（92年度着工・93年度竣工）を1年遅らせざるを得ない旨説明があった。

1991.6 新講堂の基本構想 使用目的：礼拝・式典を中心に多目的機能とする。収容規模は800名程度。教室棟との位置関係に留意。教育活動の水準を保持し、かつ将来を展望する上でも、新講堂のもつ意義は大きいことを確認。

1991.10 学院より工事計画の概要が提示。増員による収支の見通しについて、資料により説明。

1992.2 増員に伴う諸問題、教室棟と大講堂の同時着工または大講堂先送りの件等について協議する。

1992.3 新たに大学院研究科の開設構想が発表される。増員に関連して、中高部の教育計画・施設面・実施上の留意点等について協議

1992.7 旧短大校舎撤去作業

1992.12 新講堂と教室棟との位置関係、相互に支障なきよう適度の間隔を設けるようにしたい。プロセニウムアーチの形状、ステージ、音響関係。

1993.1 中学部・高等部の増員、学級数を理事長に回答。高等部5学級とする。専門小委員会として、教室棟小委員会・講堂小委員会・第二講堂小委員会の3部門に

担当を分割。特別教室として社会科・書道室・音楽科・視聴覚関係・合同教室・小講堂、さらに当初の計画になかったものとしてコンピュータ室を設定する。

1993.2 基本構想について

ヴォーリス氏設計のイメージを新校舎にも踏襲すること。そのまま保存する部屋のこと。大まかなレイアウト。特別教室とその面積。生徒会・クラブ関係部室。

1993.4 ホームルーム、教員室生徒通用口。

1993.6 新講堂の構想について詰めの検討。活用等もふまえて、講壇を東側とする。

パイプオルガンの設置、大きさ。

生徒・教職員の生活の動線をふまえて、教員室と各学年のホームルーム教室の位置を検討。

1993.7 ピアノ科室の位置・部屋数。

1993.7 本館・別館・大講堂の解体工事開始。

1993.10 第二講堂改修概要固まる。

1994.3.30 改築工事起工式。

この年度については、設計図を完成させるということもあり、関与した建築委員会が設計事務所の担当社との会合は五十七回に及んでいます。教室棟小委員会は十六回、講堂小委員会も十五回の会合を数えます。それぞれの部門の残された細部の詰めについては、時期のずれている面もあるので、概要としてまとめたものです。

1994.9 教室棟・新講堂 躯体工事開始。

1994.10 教室棟各室のレイアウト検討。

1994.10 オルガン委員会発足

1994.12 新講堂内部意匠・椅子の検討。

各室のレイアウトほぼ決定。

教室棟・新講堂の鉄骨組工事完了。

1995.4 新校舎用備品類購入予算編成。新講堂細部の検討。

東洋英和女学院六本木校地第3期計画工程表(案)

No.	(仮称) 東洋英和女学院六本木校地第3期計画工程表 (案)												平成5年10月19日 作成 三愛地研編 第三建設部				
	1992 (H4)				1993 (H5)				1994 (H6)				1995 (H7)		1996		
名称	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	1	2	3	4
設計	基本構想																
事前協議	基本設計																
近隣説明	実施設計																
建築申請	2.5ヶ月																
見積・査定・取約	2ヶ月																
仮設校舎	設計 許可工期 3.5ヶ月																
第二建築放棄	設計・見積 許可工事																
仮設トイレ設置	設計・確認 工事																
引越・取付調査	4ヶ月 地上解体																
地下掘削	3ヶ月 地下解体																
工事	工期 2.2ヶ月																
別荘工事(家用地)	設計(別荘) 工期約6ヶ月																
本部個別棟改修工事	設計(別荘) 工期約6ヶ月																
特記事項	<p>・ 建築士によるより、上記建築士等の選定は、建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。</p> <p>・ 建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。</p> <p>・ 建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。また、建築士会の承認を得た上で実施する。</p>																
建設地	建設面積 14,851.15㎡				延床面積 ㎡				延床面積 ㎡				延床面積 ㎡				

1995. 7 新講堂の音響設備・照明設備等について検討。

1995. 8 既存の校舎（現中学部校舎）との接合工事。

1995. 11 新講堂の名称案 新マーガレット・クレイグ記念講堂としたい。

1996. 2. 6 改築工事竣工式。

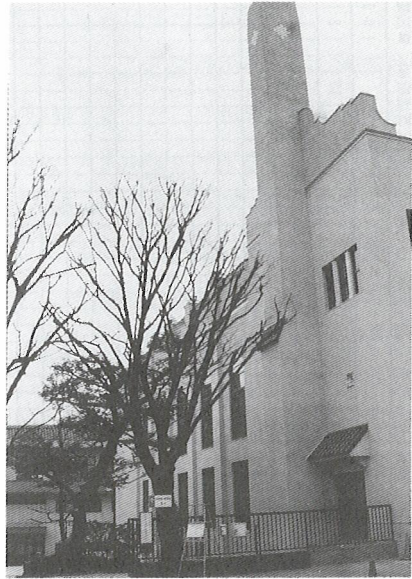
工事期間中も設計担当者と細部にわたる協議打合わせを定期的を実施。音響関係・オルガン関係については、直接間接に専門家の意向・助言をふまえて検討を行いました。

1996年度4月より使用の予定であったが、1995年度末の各式典・礼拝（中学部卒業式、高等部卒業礼拝、高等部卒業式）をいずれも新装なった新マーガレット・クレイグ記念講堂にて執り行なうことのできたのは、大いなる恵でありました。

1996. 5. 18 中学部高地鵜学部校舎講堂献堂式

1997. 6. 14 パイプオルガン奉献式。

パイプオルガンの件については、号を改めて紹介されると伺っております。



正門からの外観

プレハブ校舎の思い出

先日、清野先生から1994年度に「プレハブ校舎に入学の新入生を迎え入れ、二年間担任をした時のことを書いて下さい。」とのお便りをいただきました。

東洋英和を退いて半年余りが過ぎ、六本木の校舎は距離的にも、時間的にも遠くになりつつある。記憶の底に沈んでしまう前に、この原稿一プレハブ校舎の二年半一を記そう思う。

1993年の夏、休暇に入る前に当時の中学生（現高一、高二と大学一年）は旧校舎のホーム・ルー

元中・高部英語科教諭 雨宮美枝子
ムからプレハブの仮校舎に引越すことになった。旧短大校舎跡の空き地に二ヶ月足らずで建てられた東西に細長く並ぶ二棟の二階建てで、狭い土地に建っているとはいっても、廊下をはさんで両側に教室やスベア・ルームがある。教室も廊下もゆとりのある広さで、当時中三の担任であった私は、旧校舎の別館の窮屈な教室からスペースのあるプレハブ教室に移ったのは、背丈の伸びた生徒達にはむしろよいと思い、ほっとしたりもした。しかし、この思いはすぐに打ち消されたことを覚えて

いる。教室がそのまま落ちてきそうな騒音と響きが階下の職員室に伝わってくるので、驚いてホーム・ルームにとんで行くと生徒達が旧校舎の時と同じに走り回っているのだった。

人というのは、どこで生活しても、なんとか順応するのではないかと自分の戦争体験を通してひそかに考えていたが、この校舎での密集した人々の生活も、時間と共に少しずつ慣れていったように思う。ただし、毎日をこの中で過していない人は、頭上に響いてくる騒ぎに驚く場合が多かったので、心配のないことを度々説明する必要があった。

強い風が吹いたり、立て付けの悪いサッシのドアに寄り掛かったりして、ドアが倒れたことが幾度もあり、ガラスが粉々に割れた。大きな怪我をした人が出なかったことは本当に幸いであったと今も思っている。廊下、教室、階段の壁は、しょっちゅう穴があいた。生徒達のキックの力が強かったからかもしれないが、建材の理由もあったであろう。その度に事務所にお詫びやら、お願いに行く。おじさん達は、いやな顔もせずに黙々と穴を塞いでくれた。大変な仕事の多い日々であったにちがいない。頭の下がる思いと共に思い出している。担任の先生達は、「プレハブの建物といっても、もし丁寧に、大切に使えば、十年はもつだから、気をつけよう。」とクラスで繰り返し注意したのを覚えている。

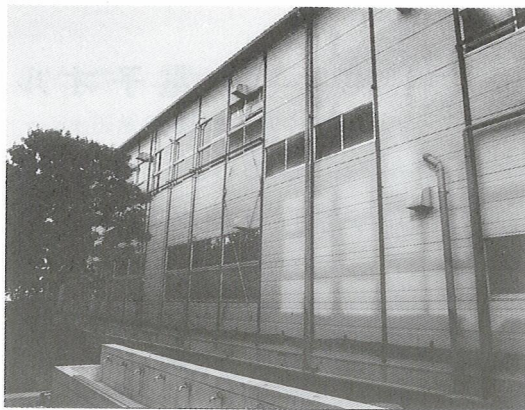
旧校舎から移ってきた翌年の1994年4月、プレハブ教室から英和の生活が始まる新中一の入学式を迎え、新入生達の四人の担任の一人に私もなった。

新しい中一の教室は、北棟一階の第二講堂寄りに廊下をはさんで二教室ずつ並んでいた。うす暗い教室では、いつも電気をつけていた為なのか、生徒達がいなくても、電気のつけ放しが多く、消

し歩く部長・教頭の先生達や事務の方達を度々見かけたものだった。新学年の諸行事もほぼ終わり、梅雨の季節を迎える頃になると、各教室が、エア・コン付きのプレハブ校舎は、にわか利用度が上がったようにみえた。蒸し暑い毎日の授業も、ここでは涼しく、ある人達には快適であり、ある人達には涼し過ぎて、セーターが必要のようであった。

この頃になると、優雅な佇まいを誇っていた由緒ある旧館は、日毎に崩されて行き、その様子を見るのを悲しく感じる人達もいたが、中一生徒達はプレハブ校舎での生活に慣れていったように思う。仮住居の為なのか、反抗期の為なのか、またはその両方の為なのか、中学生の仮校舎内の生活の礼儀、態度は次第に指導が難しくなり、行き過ぎた「いたずら」や「いじめ」、反発、反抗に悩んだ時期であったことを思い出す。いつの時代にも、どこであっても、反抗期はあるものと言われれば、そうではあるが、当時の生活を振り返ると残念ながら辛い思いが残っている。

毎朝の礼拝は、週の内、二日か三日が教室での放送礼拝となり、活発な中学生にとって、放送を静かに座って聴くことがどんなに難しいことかをつくづく知らされた時でもあった。生徒にとって



プレハブ校舎 外観 (保健室前より)

も、先生にとっても、この時間は修行ではなかったかと思う。今、あの立派な、新しいマーガレット・クレイグ大講堂で、高校生達は静かに礼拝を守っていることである。

学年が上り、中二は仮校舎の二階にホーム・ルームが移ると新校舎の建築の進み具合も窓から見るだけで、ピッチが上がっているのがわかった。仮校舎より高くなって行く新築の工事現場で働く方達からの申し出で、足場に面した仮校舎のガラス窓が曇りガラスに換えられたのは、この頃と記憶している。教室で生徒達が大騒ぎしていたり、



体育着に着がえたりするのが見えたのかもしれない。様々な場での生徒達への生活上の注意と配慮がこの頃は特に必要であったと思う。

いたずらを叱られるのを恐れて、大きなごみ用のポリ・バケツに隠れ

た人、廊下に水を撒いて、滑ってしまった友達や先生を笑った人、雪を教室に持ちこんで、部屋中水だらけになったのに掃除をエスケープした人。思い出すと限りがない。

威風堂々の新校舎が完成に近づき、年度末の本校舎への引越しが決まった。中学生達は、それまで高校生が使っていた校舎へ移り、高校生達は新しい校舎へ移ることとなり、二年半のプレハブ仮校舎の生活は、1996年3月をもって終了したのであった。

仮校舎の頃をふり返ると、この時期を共に過した生徒達、同僚の先生達が、なぜか、ひどく懐かしい。東洋英和の長い歴史の流れの中では、ほんの短い時であったことと思うが、辛かったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、笑ってしまったこと等が、プレハブの白い壁と青灰白の屋根の校舎の姿と共に次々と浮かんでくる。ここで中学校生活を経験した生徒達も、今は新校舎で落ち着いた高校生活を送っていることと思う。

あの頃のことを覚えているだろうか。どのように思い出すことがあるのだろうか。聞いて見たいと思うこの頃である。

1997-11-30

電子オルガンの時代

昨年（1997年）6月、装いも新しくなった新マーガレット・クレイグ記念講堂に永年の念願がかなってパイプオルガンが設置され、創立百周年を機に始められた中高部の校舎建築がこれをもって完結した。多くの方からの貴い献財と様々な形での協力によって捧げられたオルガンは毎朝の礼拝

中・高部音楽科教諭 河野和雄
の中で壮麗な響きを大講堂に満たし、礼拝の音楽が豊かになったことは感謝にたえない。オルガン設置については改めて書くこととして、ここではそれ以前のことにについて若干の思い出を述べさせていただきます。

筆者が富岡正男先生の後任として東洋英和に就職したのは1972年の4月、その頃の大講堂にはヤマハ・エレクトーンのF1といういわゆる電子オルガンがあった。これはパイプオルガンが入るまで約30年間礼拝に使用されていたが、クラシック用に開発された機種であり、当時の電子オルガンとしては一定の音楽的水準を満たしたものであった。真空管式のパワーアンプによって増幅され、ギャラリーに設置された大型のスピーカーから響く音は所詮電子音ではあったが、元の大講堂の柔らかい響きとは良くマッチしてそれなりに充実感のある音であった。

オルガンを専攻したものとして、毎朝の礼拝の他にも何かこのオルガンを使っての活動ができたらと考え、就任の年に2つの活動を始めた。一つは週1回昼休みに自由にオルガンがきける機会を作ること。気が向いてそこへゆけばオルガンが鳴っていて聞くことができ、飽きたら出るのも自由、コンサートと呼ぶほどのおおげさなものでないので「オルガンと瞑想のとき」と名付けた。これは欧米でよく行われる教会の自由なオルガンコンサートを模したものである。筆者が留学中師事した先生も自分の教会で毎土曜日に、近隣の人達を対



旧、マーガレットクレイグ記念講堂

象に「オルゲル・ウェスパール」（オルガンによる晩禱）と名付けたオルガン演奏を続けていた。

最初の頃は毎金曜日欠かさず行い、毎回プログラムを作っていた。Organ Meditationの題字は当時いらした達筆なヘザリントン先生にお願いして書いていただき、またあちこちの本から切り抜いたオルガンの絵をカットとして使った。この活動は時々とぎれながらも数年続いた。オルガンだけで続けることがだんだんしんどくなると、合唱や他の楽器をいれたりしていたが、次第に生徒の演奏を中心とした不定期なアフタヌーンコンサートへと変わっていった。

もう一つはオルガンのレッスン。生徒の中から希望者を募って始業前や放課後にオルガンの個人レッスンをする活動である。オルガン同好会、楽器科オルガン部などと名称をかえながら細々と続けてきたこの活動の中から今井奈緒子、米山浩子（旧姓西村）など卒業後音大に進み、現在専門家としてその世界で活躍している人たちが出た。

F1は現在も生徒の練習用として使用されている。ヤマハの技術者の話では、この機種を導入した所ではどこもかなり早い時期にパイプオルガンが設置され、電子オルガンは使われなくなり、そのために故障して廃棄された所が多いそうだ。英和では毎日使っていたため故障もするがまだまだ現役である。

旧短大講堂（現第2講堂）に設置されたクロダトーンも国産の電子オルガンであるが、こちらももう20年以上使用されている。パイプオルガンが設置されるまでは、オルガンの音はこんなものと思っていた生徒も、本物のオルガンの音が聞けるようになった今はその違いが分かったことであろう。

オルガンはその置かれる場所の条件が整わなければ、設置することは難しい。もし無理していれ

でも十分に良い響きを出すことはできない。大講堂にパイプオルガンを設置したいとの願いは昔からもっていたが、校舎の将来計画が未定な内は、それを具体的には考えにくかった。静岡英和には1987年、山梨英和には1990年にパイプオルガンが設置されたが、同じ英和として羨ましいかぎりであった。その中で2度ほどパイプオルガンの導入を考えたことがある。

百週年の少し前、現在の中学部側の校舎の設計段階の時のことである。6階に小さなチャペルができることになった。新しいものを作る時は夢は広がる。最上階の僅かに高い天井を利用し、また校庭側へ切り妻状に屋根を延ばして空間を広げ、小さなギャラリーをつけそこに小型のオルガンを設置したらどうかと提案した。紙でチャペルの模型まで作って建築委員会に建議したのであるが、残念ながら採用されなかった。ギャラリーやオルガンはともかく切り妻屋根のチャペルは実現すれば、あえていえばあまり趣のない建物南側のデザインにミッションスクールらしいアクセントを添えたのではないかと今も思うことである。そう言えば、あのチャペルの模型はどこに行ったのであろう。それきり帰ってはこなかった。

次に考えたのはそれから数年してである。函館の遺愛学院のオルガンを弾く機会があった。講堂に入ってみてびっくりした。英和の旧校舎の設計者ヴォーリスによる設計であるが英和の大講堂とそっくりであった。そこに比較的小型であったが（10ストップ）パイプオルガンが設置されていた。座席を減らす数をできるだけ少なくするために底面積の少ない背の高い楽器であった。大講堂にいれるとしたらこんな感じになるのかなと思いつく

ことしばし、実際に大講堂でその寸法を計ってみたりもした。結果的には大講堂も取り壊すことになり、それ以上具体的に考えることには至らなかった。

今日、新しい響きのよい大講堂にすっかりなじんで存在する美しいオルガンを見るにつけ、ここに至るまでの長い道のりを覚え、その導きと恵に心から感謝するものである。

余 談

いつもは6階のチャペルにおいてあって大講堂でも使うことのある移動用のオルガンがある。ポジティブオルガンとよばれ、これも立派な小型のパイプオルガンであるが実はこれは英和のものではない。日本オラトリオ連盟という合唱団の連盟が所有する楽器であるが、もう10年ほど英和で預かっている。地下にある練習所のスペースが充分でなく、搬出、搬入も不便であるとのことで、以前筆者がよく一緒に演奏したことのよしみで、こちらとしては有り難くお預かりして、ほとんど学校の楽器のように使用させていただいている。この数年は持ち主が使用することがほとんどない不思議な楽器となっている。

あとがき

新しい校舎の中に身をおきながら、かけあしで過ぎていった改築時代をふと思い出します。

110 余年の英和の歴史の中で疾風怒濤のようだったプレハブ校舎の生活は“非常に特別な日常”だったように思われます。

（中高部 古澤育恵 保坂綾子）